

第66回（社）日本脳神経外科学会総会

片側顔面痙攣に対する神経血管減圧術：術中AMRモニタリングの有用性

Intraoperative AMR monitoring during neurovascular decompression surgery for hemifacial spasm

海老原 弘一¹、山上 岩男¹、田宮 亜堂¹、樋口 佳則¹、佐伯 直勝¹、岡 信男²

¹千葉大学 医学部 脳神経外科、²千葉療護センター

【目的・方法】Abnormal Muscle Response (AMR) は片側顔面痙攣 (HFS) に特異的な誘発筋電図で、その病態生理を反映している。HFSに対する神経血管減圧術 (NVD) における術中AMRモニタリングの有用性・問題点を明らかにし、AMRやHFSの病態について考察する。【方法】24例のHFS (31～79歳：54±13歳、男8、女16、左13、右11) に対するNVDにおいて、持続的な術中AMRモニタリングを行い、手術経過・結果とAMRの変化との関連を検討した。【手術結果】HFSは完全消失22例、軽快1例、不変1例であった。

【モニタリング結果】術中AMRは1例を除く23例で記録可能であり、手術終了時には全例で完全に消失した。術後HFSが軽快や不変であった症例でもAMRは消失した (false positive)。AMR消失の時期は、減圧操作にともない：19/23 (73%)、硬膜切開に引き続き：8/23 (31%)、下位脳神経の剥離中：10/23 (38%) などで、AMRの一過性消失も10例 (38%) に認めた。AMRが減圧操作まで不変で、かつ減圧操作により消失したものは9例であった：specificity=9/23 (39%)。【結語】NVD術中におけるAMRは減圧操作により消失するだけでなく、硬膜切開や髄液流失により一過性消失や波形・電位の変化を示すなど多彩な変化を示す。このようなAMRの多彩な変化には顔面神経核の異常が関与していると考えられる。